子供の質問

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
子供の質問

【Ｎコード】
Ｎ１４１４Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
　甥の子供由紀夫の質問に困っている兼修。けれど頑張ってその都度応えているうちに由紀夫も。子供には誠意を以って当たらないといけないです。

第一章

子供の質問

「これ何か？」
「これ何か？」
甥の子の由紀夫の質問はいつもこれだった。それを受けて的林兼修はいつも当惑するばかりであった。
しかしそれでも。彼は真面目に応えるのだった。
「これは神社や」
「神社？」
「そや、神様がおるところや」
こう真面目に応えるのである。
「そやからな。ここにお参りしてな」
「これ何か？」
しかしここでもこれであった。今度はお賽銭箱を指差している。
「これ何か？この木の箱」
「これはお賽銭箱や」
またしても真面目に応えるのだった。
「お賽銭箱や。これはな」
「お賽銭箱？」
「ここにお金を入れて神様に御願いするんや」
言いながら自分の財布から十円を取り出す。そして実際に箱の中に入れてそのうえで手を合わせてみせる。
「こうやってや」
「神様に御願い？」
「そうや。こうやって御願いするんやで」
また由紀夫に説明するのだった。
「どや。由紀ちゃんもやってみるか？」
「うん。そやったら」

由紀夫は素直に彼の言葉に頷いて手を合わせる。今はお金を持っていないがそれでもだった。ちゃんと兼修の横で手を合わせる由紀夫だった。

由紀夫はとにかく何かにつけて質問をする。しかもその相手はいつも兼修だった。それで彼はこの甥の子が来た時には非常に疲れるのだった。

この由紀夫が自分の家に帰ってから兼修は。とりあえず家のコタツの中でほっとしていた。まさに五月蝿いのがいなくなってよかったといった顔であった。

その顔で蜜柑を食べる彼に。一人の初老の女が声をかけてきた。

「大変やったなあ」

「ああ、姉ちゃん」

彼の一番上の姉である静子である。彼の家族と共にこの家に暮らしており幼いうちに母親を亡くしている彼にとってはまさに母親に等しい存在である。ふっくらとした身体ににこにことした顔をしている。かなり穏やかな気を出している老婆であった。

「由紀ちゃんには困るで、ほんま」

「ほんまやなあ」

静子は穏やかな調子で兼修に応えてきた。

「いつもいつも質問ばかりやからな」

「それもわしばっかりにな」

本当に少しばかり困った顔で言う兼修だった。

「何でやろな。質問ばかりで」

「あれちゃうか？」

静子は兼修の向かい側に座りながら言ってきた。座るとまずは目の前にあった蜜柑を手に取った。そしてその蜜柑の皮を剥きはじめたのだった。

「兼ちゃんが学校の先生やからちゃうか」

「そやから何でも知ってると思ってるっていうんやな」

「そうちゃうか？」

こう彼に言うのだった。言いながら蜜柑の皮を剥き続けている。
「やっぱりな」
「わしが学校の先生やからか」
実際にそうである。彼はある公立高校で世界史を教えている。しかしこのことはまだ由紀夫にはわからないとも思うのだった。
「けれど由紀ちゃんはまだ言葉話せるようになったばかりやしな」
「まだあんたの仕事がわからへんっていうんやな」
「わかる筈がないで」
そうとしか思えなかった。兼修は姉に言いながら蜜柑の袋を一つ口の中に入れた。そうしてそれを口の中で噛んで味あうのだった。
その蜜柑の甘酸っぱさを楽しみながら。さらに姉に対して言うのだった。
「そんなのは」
「わからへんっていうんやな」
「そや。それで何でわしにばっかり尋ねるんや?」
どうしてもそれがわからないで首を傾げるのだった。
「それがなあ」
「それはあんたあれやで」
しかし静子は穏やかな笑みで彼に言うのだった。言いながら彼女もまた蜜柑の袋を口の中に入れる。それは兼修が口の中に入れたものより幾分大きかった。

第二章

その幾分か大きい蜜柑の袋を食べながら。さらに弟に話してきた。
「雰囲気やで」
「雰囲気？」
「そうや、雰囲気や」
それだというのである。
「それから尋ねてきてるんやで、由紀ちゃんは」
「わしの雰囲気か」
「だからあんたは学校の先生やで」
またこのことを話す静子だった。
「学校の先生の雰囲気が自然に出て来てるんや」
「そうなんか」
「そうやろ。だからあんたに質問してくるんやで」
「そうやったんか」
言われて僅かではあるが納得した。考えてみれば大学を卒業してからもう二十年になるがずっと教鞭を取っている。もう教師の仕事が板についてきていると言って過言ではない。
その彼自身を考えてみるとだった。確かに雰囲気が出て来ていても不思議ではない。そうしたことを考えて納得するものが出て来たのである。
そうしたことまで考えながら。また口を開く兼修だった。
「子供でもわかるんやな」
「感じてるんやで」
それだとまた言う静子だった。
「あの子もちゃんとな。感じてるんやで」
「そうやったんか」
ここまで話して今度は完全に頷くことができた。
「あの子はわしからそういうのを感じてるんやな」

「それで頼りにしてるで」
今度はにこりと笑って兼修に話してきた。
「あんたをな」
「そうか。頼りにしてくれてるんか」
「あんたやったら答えてくれる」
このことを話す。
「それで教えてくれるって。絶対にや」
「まあわしは尋ねられたら答えるで」
兼修はそれが何でもないといったふうに答えた。ここでまた蜜柑を一袋口の中に入れる。そうしてまたその甘酸っぱさを味あうのだった。
その甘酸っぱさを楽しみながら。また姉に答えた。
「絶対にな」
「そやろ。だから由紀ちゃんは尋ねるんやで」
「それも感じてるんやな」
「そういうことや。わかったやろ」
「ああ。わかった」
姉の言葉に対して頷いた。
「これでな。よくな」
「ほなこれからもな」
「ああ、答えるで」
にこりとした笑みになった兼修だった。
「これからもあの子の質問にな」
「そうしたらええわ。ずっとな」
「けれどあれやな」
話が一段落したところで少しばかり苦笑いを浮かべてまた言う兼修だった。
「これがずっとやとな」
「困るってことはないやろ？」
「いや、やっぱり大人になってもこれやったら困るで」

かなり先のことを話すのだった。
「ほんまに。そんなんやったらな」
「あっ、よう言わんわ」
今の兼修の言葉には思わずこう言ってしまった静子だった。言いながらまた蜜柑の袋を手に取っていた。当然食べる為である。
「幾ら何でもそれはあらへんやろ」
「いや、わからんで」
困ったような笑みを浮かべてさらに言ってみせた。
「あの子はな。わからんで」
「そやけど大人になってもあのままはないやろ」
静子はこう考えていた。
「まあないで」
「そやったらええけれどな」
兼修はこの辺りがかなり不安であった。
「ほんまにな」
「まあこれからが楽しみやな」
静子は不意にこんなことも言った。
「これからな」
「ああ、そやな」
このことには素直に答えることのできた兼修だった。

第三章

「ほんまにどんなふうになるかな」
「それ。楽しみにしとこうで」
「ああ」
こんなやり取りをしたコタツの中だった。それから暫くしてまた由紀夫が兼修の家に遊びに来た。彼は今度はこの子を住吉大社に連れて行ったのだった。
そしてそこでまたしても。由紀夫は兼修に尋ねるのだった。
指差したのは橋だった。極端にアーチ状になっているその橋を指差して。彼に尋ねてきた。
「これ何か？」
「これは橋や」
まずはこれを橋だと答えるのだった。
「川とか池に作るもんや。人様が渡れるようにな」
「それこの前教えてくれたな」
このことはちゃんと覚えている由紀夫だった。
「橋ってそういうもんやって」
「そやったな」
「けど何でこの橋あんなに上に曲がってるん？」
彼が気にしているのはこのことだった。
「この橋何ていうん？」
「たいこ橋っていうんや」
この橋の名前も教えるのだった。
「この橋はな」
「たいこ橋っていうんや」
「どや、おもろい橋やろ」
完全な関西弁で由紀夫に告げる。
「こんな形の橋があるってな」

「橋ってまっすぐなだけやないんや」
由紀夫にとってはそれが思わぬことだった。少なくとも彼は目を驚きで丸くさせていた。そのうえで好奇心でその目をきらきらとさせていた。
「こんな曲がったのも」
「何でもそうやで」
兼修は穏やかに笑って彼に話した。
「まっすぐなものもあれば曲がったものもな」
「色々あるんやな」
「そうやで。それでまっすぐがよくて曲がったのも悪いってわけやないんやで」
「どっちもええのん？」
由紀夫はまた兼修に顔を向けて尋ねた。彼にはまだわかりにくいことだったがそれでも大叔父に対してここでも尋ねたのであった。
「それは」
「ええんや。何でもそれぞれやからや」
「それぞれなん」
由紀夫は目をぱちくりとさせて兼修の話を聞いていた。
「何でもそれぞれなん」
「そうや。わしはわし、由紀ちゃんは由紀ちゃん」
自分と甥の子に例えても話すのだった。
「違うやろ？けれどそれが悪いってことやあらへん」
「そうなんや」
「そうや。まあそれはおいおいわかるから」
まだ由紀夫には難しい話をしていると思ってここでこの話は止めた。そうしてそのうえで話を変えて。またたいこ橋を見て言うのだった。
「ほなこのたいこ橋な」
「うん」
「これから二人で渡ろか」

由紀夫に顔をむけて告げた言葉だった。
「二人で。どうや？」
「うん。それやったら」
由紀夫も楽しそうに笑って兼修のその言葉に頷いた。
「渡ろ。おっちゃん」
「ああ。二人でな」
こうして今は二人並んで、由紀夫の手を握ってこのたいこ橋を渡る兼修だった。これは昔のことで今は。由紀夫はもう大人になっていて子供もいる。大学の助手になっている彼はもうすぐ助教授になるとも言われていた。しかし今日は兼修の家でぼやいていた。

第四章

「いや、正好やけれどな」
「どないしたんや？」
年老いた兼修がにこにことしながら彼の話を聞いている。二人はコタツの中で向かい合って座っている。それを挟む形で静子もこれまたにこにことしながら同じコタツの中にいる。実質三人での話になっていたが由紀夫と兼修がメインになって話をしていた。
その中で由紀夫は兼修に対してそのぼやく顔で話していた。
「もう大変なんや」
「どう大変なんや？それで」
「何かあったらな」
そのぼやく顔で話す。
「これ何か、あれ何かって聞いてきてな」
「それが困るんやな」
「そや。もう何でもかんでも尋ねてくるんや」
そうだというのである。
「それがなあ。もう大変で」
「何や、あんたと同じやないか」
「ほんまやなあ」
静子は兼修の今の言葉にその穏やかな笑みで応えた。
「由紀ちゃんの子供の頃にな」
「そっくりやで」
「そっくりなんか」
由紀夫は二人からそう言われてまずは目を丸くさせた。
「僕と正好が。顔だけやなくて」
「あんたの子供の頃もそうやったんやで」
「そうやったなあ」
静子は兼修の言葉に応えているだけだがそれでも何故か妙な安心

感を与えるものがあった。それは彼女の人徳からであろうか。今では家全てのお母さん、いやお婆さんとも言っていい立場になっているのだ。
「あの時わしにずっと何でもかんでも尋ねてきて困ったで」
「そうやったんやで」
「覚えてないで」
由紀夫はその話を聞いても困惑した顔になるだけだった。
「そんなん」
「あんたが覚えてなくてもそうやったんや」
「大変やったんやで」
「そうやったんか」
その困惑した顔で話を聞き呟く由紀夫だった。
「僕そんな子やったんか」
「それで正好ちゃんもなんやな」
「ほんま親子やな」
「そやったら僕は正好の質問に何でも答えなあかんのやな」
二人の話を聞いて今度はこう思う由紀夫だった。子供の頃の可愛らしい感じはなく今ではまさに学者といった感じの知的な面持ちになっている。黒縁眼鏡が実によく似合っていて端整といってもいいその顔は本当に学者、若しくは銀行員のように見えた。
「親やし」
「そうや。何でも答えてあげたらな」
兼修はその由紀夫に話す。
「あんたみたいになるかもな」
「僕みたいにかいな」
「わしがあんたの質問に全部答えて」
その彼が子供の頃の話である。
「それで今のあんたがあるのかもしれんしな」
「今の僕がかいな」
「だから何でも答えるんや」

これが結論なのだった。
「ええな。何でもな」
「わかったわ」
由紀夫は兼修の言葉に素直に頷いた。
「そやったらな」
「子供の質問には何でも答える」
兼修は最後に言った。
「それが親の、大人の務めやで」
「ほんまやなあ」
静子も穏やかに彼の言葉に頷いた。由紀夫はそんな二人の言葉を聞きながら彼等のその言葉を心の中に入れた。それは妙に温かく、そして優しいものだった。

子供の質問　　完

２００９・８・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1414i/

子供の質問

2010年10月8日15時27分発行